

比較文化会報

Dec. 1994 No.15

本部事務局 青森県弘前市稔町13-1
弘前学院大学英米文学佐藤研究室
電話 (0172) 34-5211 内線216

発行者 芳賀 馨
編集者 楠 純一

「第17回大会を迎えるに当たって」

会長・準備委員長 芳賀 馨

「比較文化会報No.14」まで会報すべてを手許に置いて筆をとった。会報を見ただけでも約20年間の学会の足跡が判る。No.1の会員名簿には総数60名の名前がのっている。因みに「比較文化研究No.24・'93」の名簿では三七五名である。

「No.1」の初代会長・故山浦拓造弘前学院大教授の「こあいさつ」に見られる英文学者の卓見、「No.2」の初代副会長・故花田隆弘前大教育学部教授の「比較文化学への期待」に示された国際人としての良識を始めとして会報にも各種の秀れた比較文化小論が多数展開されている。最近号「比較文化研究No.25・'94」までの「研究」25冊の中の秀れた比較文化論や新しく書かれる比較文化論に、日本比較文化学会小史を加えて「比較文化学論纂」という論集を近年中に出版しようという計画が、本稿を書きながら湧いてくる。会員諸氏の御高見を私まで寄せて頂きたい。

さて、第17回大会会場が東北学院大学教養学部(泉キャンパス)に決ったので、東北学院大学の現状にふれておきたい。本学は、文・経・法(青葉区)工(多賀城市)教養(泉区)と三つのキャンパスに分かれた五学部、東北地方では最大の私立総合大学である。既に他の四学部には博士課程の大学院があり、教養学部は大学院人間情報学研究科(修士課程)の大学院カリキュラムを基礎に据え総合科学

的履修科目を提示したユニークな大学院で、担当教員も一般教養科目担当者が多い。今後の教養(学)部改組の一つの前途となり得る組織である。

教養学部が新しい泉キャンパスに出来て卒業生をまだ二回しか出していないので、校舎は真新しくキャンパスも広々としている。都心から幾分離れているが地下鉄(仙台駅乗車、泉中央駅下車)を利用すると交通の便がよい。

次に第17回大会の実施内容予定を準備委員長私案も念んで述べたい。

・大会準備委員会構成
南東北支部幹事会構成員九名と会場校三名、計12名

(1) 大会事務局(書類郵送又は連絡先)
〒九八〇一三一 仙台市泉区天神
21111 東北学院大学教養学部芳賀研究室(電話)〇二二一三七五一
一一一 内線三五五

(2) 〒九八一 仙台市青葉区荒巻神明町2136(電話)〇二二二七四一四
〇二 芳賀馨自宅
なお、大会当日は「芳賀研究室」

・大会日程
第一日 一九九五年六月九日(金)
会場 〒九八〇 仙台市宮城野区つつじが岡四丁目一五 仙台ガーデンパレス(電話)〇二二二九九一六二二(一代)
(仙台駅東口より徒歩3分)

〈追記〉九日(金)と十日(土)の宿泊については、学会として、九日・十日共それぞれ

シングル30室を予約確保しているので、会員各自が学会確保の分として予約できる。

日程

(1) 役員会 16時〜18時 4F・亀甲の間

(2) 一般会員パーティ 18時〜20時 4F・蓬莱の間(会費五千円)

第二日 一九九五年六月十日(土)

会場 東北学院大学教養学部(泉キャンパス) (1)〜(5)2号棟、(6)3号棟2F 演習室

日程

(1) 受付 9時30分〜

(2) 総会 10時〜10時30分

(3) シンポジウム 10時30分〜12時30分

(4) 昼食 12時30分〜14時

〈記〉食堂は三カ所あるので当日説明の予定

(5) 記念講演 14時〜14時50分 東北学院大学・田多英興教授(心理学)

― 以上は2号棟2F ―

(6) 研究発表 15時〜17時 3号棟2F 演習室

なお、十日(土)大会終了後、仙台ガーデンパレス2F楓の和室で夕食会を開催します。(会費二千五百円)

最後に、大会当日受付の混雑を避けるため、一九九五年年度会費納入については、プログラム発送時に、会費郵送のための「振込用紙」を同封するので、なるべく前もって振り込んで頂きたい。また、シンポジウム講師を各支部毎決めて十二月中に芳賀馨宛連絡頂きたい。(東北学院大学教養)

第十六回大会報告

副会長 太田 敬雄

今年度の大会は関東支部の担当のもと、新島学園女子短期大学で六月十一日に開催された。新島短大では以前にも大会が開催されたが、その後建築されたグレース・ホールを主会場としての大会運営には新鮮だった。しかし、久しぶりに会場校を担当した者の収穫は、学会の確実な成長を実感できたことだろう。

「異文化教育―異なる価値観の受容に向けて―」をテーマとした、シンポジウムはコミュニケーション・スタイルの違いからノン・バーバル・コミュニケーションの諸相、さらに異なる文化の持つ価値観が日本の学生にどの様に受け止められているかの確認と進んだ。異文化教育の問題点と可能性を示唆する有意義なシンポジウムであった。

十七件の研究発表も、それぞれに充実していたようで、五室に別れていたため一部しか聞くことが出来ないのが残念であった。

記念講演では東京大学の能登路雅子氏が日米の映画を比較しながら「社会正義に見る日米比較」を語られた。正に「比較文化」であったのみならず、学会員にとっても一般の聴衆にとっても誠に興味深い講演であった。

充実した一日は、懇親会でさらに盛り上がり、来年の仙台での再会を誓って散会した。

《第十六回大会総会報告》

一 報告

庶務報告

(1) A 「比較文化研究」発行について
22号、23号、24号及び25号を発行。

B 主な送付先 国立国会図書館
HARVARD YENCHING LIBRARY
郵政省郵務局など。

(2) 第16期日本学術会議登録について
学術研究団体として認められた。
(3) 第17回大会について

A 開催校 東北学院大学教養学部
(泉キャンパス)

B シンポジウムのテーマ
「比較文化論再考」

(4) 学術情報センター(NACSIS)サー
ビス案内について
文部省学術情報センターより①情報
検索サービス、②電子メールシステ
ムサービスの案内があった。

2 会計報告
別紙資料に基づき報告された。

二 議題
1 「比較文化研究」編集について
(1) 欧文論文を投稿する場合、二〇〇
字以内の内容を要約を日本語で書いて
添付する件が審議されたが、継続審
議となった。

(2) 編集に統一性を与えるため、編集
委員名の配列を「あいうえお」順(南
東北方式)に、との提案があったが
これも継続審議扱いとなる。

2 第18回大会について
開催校は関西支部内から選ばれるこ
とになった。シンポジウムのテーマ
は次回までに決定の予定。

3 顧問に緒方純雄氏追加
学会顧問として元新島学園女子短大
の高道基氏に代わり、現学長緒方氏
が選出された。

《本部事務局だより》

1 入会希望者へ

本学会に入会を希望する方は、本部事務局へ「入会申込書」を提出して下さい。折り返し、必要書類をお送り致します。入会申込書は本部事務局および各支部に備えてあります。

2 第17回大会案内
時 一九九五年六月十日(日)
開催校 東北学院大学教養学部(泉キ
ャンパス)
問合先 千九八〇一三一 仙台市泉区
天神沢二丁目一
東北学院大学教養学部 芳賀
馨研究室内 芳賀馨
電話 〇二一三三七五一
一(代)
ファックス 〇二一三三七五
一四〇四〇

3 研究発表希望者へ
研究発表を希望する方は次の要領で投稿願います。

(1) レジュメをワープロなどで、B5
版横書一枚にまとめて下さい。その
際左右の余白を二センチほど残して
下さい。

(2) 一九九五年三月三十一日必着で上
記芳賀馨宛に書留でお送り下さい。

4 シンポジウム・テーマと講師
第17回大会シンポジウムのテーマは
「比較文化論再考」です。各支部は早
い時期に講師を一名選出して下さい。
選出された講師は、(1)及び(2)とも研究
発表者の場合の要領で、レジュメをお
願います。

5 論文発表希望者へ

学会誌「比較文化研究」は現在年に三
回(南東北、関東、関西各支部が担当)
発行しております。論文掲載希望者は
本部事務局または各支部編集責任者に
お問い合わせ下さい。

6 学会紙「比較文化会報」に近況報告、
支部活動報告、研究部会報告、新刊紹
介等で投稿なさる方は、左記の要領で
ご応募下さい。

(1) 近況報告
縦書 十八字×七行

(2) 新刊書、編注書等の紹介
近況報告の場合と同じ

(3) エッセイ投稿
縦書 十八字×三十行

(4) 支部報告、研究部会報告
縦書 十八字×六十行
投稿メ切り日 毎年七月三十一日
投稿先 千九六〇一〇二 福島市光が
丘一番地 福島県立医科大学
数学講座 楠 純一

《近況のお知らせ》

関西支部の活動

副会長 石黒 昭博

関西支部では、発足以来、年十回の講
演会と研究発表会をおこなっている。

研究発表は、主に大学院生が中心とな
って、各回二名ずつ三十分間の話題提供
をおこない、その後十五分間の質疑応答
の時間を設けている。

講演は、各大学の先生に約六十分間の
お話をお願いしている。毎年、秋の釜池
先生の日本文化についての講演、学年末
の斎藤勇先生のヨーロッパ中世文化につ
いての講演は特に好評で、楽しみにして

いる者も数多い。
 参加者数は最近の会員の増加と相まって、毎回四十名を超える。研究発表の内容は、文学、言語学、人類学、社会学、法学、商学、経済学と多岐にわたり、比較化学会の面目躍如たるものがある。会の終了後は、恒例の懇親会をおこない、鍋をついたり、ビールを酌み交わしたりで、談論風発となることも珍しくない。

《会長室だより》

会長 芳賀 馨

去年の総会で「会長室」を設けることにした。主として日本学術会議の連絡事務を担当するからである。毎年十件程度の用事がある。その中の幾らかを紹介する。

- 第16期日本学術会議会員の選出に係る学術研究団体の登録申請の結果について
- 関連研究連絡委員会の指定及び推薦人の数の配分について
- 第16期日本学術会議会員の候補者及び推薦人の届出に関する説明会の開催について
- 平成六年度における学術研究会集開催予定調査について
- 第16期日本学術会議会員候補者の資格の認定について
- 第16期日本学術会議の補欠の会員として推薦すべき者の決定について
- 第16期第一世話担当研究連絡委員会の委員候補者の推薦について……等々
- その他「日本学術会議だより」と「日本学術会議月報」が毎号送られてくる。手許にある学術会議関係の資料を次に列

記する。

平成五年度アジア学術交流を促進する会会員名簿・アジア学術会議—科学者フォーラム—平成六年度における学術研究団体の学術研究会集等開催予定一覧・女性科学研究者の環境改善の緊急性についての提言—調査報告我が国における学術団体の現状—首都機能の一極集中問題。所で上記は余り関心と呼びそうな話題でもないが閲覧希望の方は芳賀迄御連絡を乞う。

序でに下記大学の「比較文化研究」というタイトルの論文集も会長室にあるので、必要な方は御連絡を。
 東京大学教養学部・広島大学総合科学部・東京女子大学・盛岡大学
 (東北学院大学教授)

会員新刊紹介

- 芳賀馨・太田敬雄・小林俊哉 編注 *Crime in the Streets* (路上の犯罪) (開文社 一九九四年二月)
- 作者レジナルド・ローズが、都会の貧しい地域に育つ若者達が犯罪の道を暴進する姿を描く。講読や会話の補助に、教育学・心理学・社会学の原書講読に適切。ナディヌ・バタグリア モーリス・ジャケ 佐藤公彦 編注
- A VOUS DE PARLER* (フランス語で話してみよう) (朝日出版 一九九四年)
- 会話からスタートし、それを文法で裏付け、講読で発展させ、発音矯正をし、最後に知識を確認する仕組になっている。石黒昭博著「近代英語における主語の概念」(南雲堂 一九九三年十月)
- 本書は、氏が同志社大学に提出された

博士學位論文をまとめたものである。

過去におけるさまざまな主語論が綿密に検討され、氏の恩師にあたるフィロモア博士の格文法理論に依拠した独自の主語論が展開されている。主語論という出口の見えない難問に積年果敢に取り組んだ本書は、氏の三十年にわたる地道な研究が見事に花開いた労作といえよう。石黒昭博・山内信幸・赤楚治之・友次克子・北林利治著「現代の英語学」(金星堂 一九九三年十月)

本書は、英語学の入門書として、必要最低限の事柄をできるだけ平易なことで解説し、さらに、最近の動向も紹介したものである。わずかに二百頁たらずのなかで、ほぼすべての分野が過不足なくとりあげられていて、学習者だけでなく教授者にとっても負担とならない点が魅力の一つとなっている。

- 島中康男・小宮山博著「イギリスの文学」(英象社 一九九三年十二月)
- 本書は、概説と演習をかね備えたユニークな英文学史である。演習文には注も付して読者の便に供している。
- 受贈雑誌 (一九九三年四月—一九九四年八月)
- 『聖泉論叢』増刊号 (一九九三年十月)
- 聖泉短期大学学会
- 『日本教科教育学会誌』第16巻第2号 (一九九三年六月)、第3号 (十一月)、第4号 (一九九四年三月)、第17巻第1号 (一九九四年六月) 日本教科教育学会誌
- 公開市民セミナー
このセミナーは、大槻一夫氏のコーディネート

《支部からの報告》

インターネットにより開催された。大槻氏は福島市内で函廊を経営されている。日頃函廊に集う仲間の楽しい話しの中からこのアイデアは生まれた。森先生がその話し仲間の中心人物であることはもちろんである。

ふくしま森のセミナー
 六月四日 沢の茶屋・杉木立広場
 国際学生会議のテーマ・ポラントピアを考える。
 尾崎 良太

関西支部活動報告 (一九九三年度)

- 四・二四 スピーチエラーの分析と早口言葉 堀口 誠信
- 短大・大学におけるワープロ関係科日について 麻生 規子
- 堀辰雄と西洋文学 河野 仁昭
- 六・十九 SRE時制理論の体系的接近法 高見 有彦
- Inter-cultural Sensitivity—異文化間コミュニケーションからのアプローチ— 萬戸 克憲
- 七・十七 私室から現実へ—*Man-Field Park* のヒロインの社会教育— 成田由香子
- Charles Dickens—William M. Thackeray—の比較

九・十八 島中 康男
Peoの「愛の物語」について—ナルシズムとしての愛の不可能性— 永田 明美
Mauillersの中性的あるいは両性具有的なヒロイン達 神谷久美子
—名訳とは何か— 釜池 進

十・十七 Audio Visual Approachの可能性について—キャプションの教材としての有効性— 小笠原真司
語用論とテキスト分析 石黒 昭博
自由の国から—マーク・トウェインの苦難 那須 頼雅

十一・二七 トム・ストップバードの戯曲におけるドラマ構造と映画における映像表現 平塚真美子
S. Andersonの短篇Death in the Woodsをめぐる—比較文化的多面解釈へのアプローチ— 井上 博嗣

十二・二五 ミルトンのイヴ 谷本千雅子
On the Treatment of Metaphor in Cognitive Psychology 高尾 典史
E. C. Bridgmanの英訳『三字経』 太田 幹雄

一・二九 ホチとSPOTTIE 堀口 誠信
驚異の記憶術? 『スーパラーニング』実践授業報告 十・二〇 イメージ 高橋八重子

大仏次郎『帰郷』をめぐって 森下 和彦
貿易取引における法務問題—各国法の比較を題材に— 河野 仁昭
河野 公洋
地獄めぐり会ったマッキントッシュの男の正体は?—『ユリシズ』第6挿話より— 佐野 仁志

『カンタベリー物語』再考—中世の聖と俗— 斎藤 勇
南東北支部活動報告 (一九八八年度) 斎藤 皓
クリーニングの世界 三・二五
TFEL in the UK and USA 芳賀 馨

織維業界の現状と八八年フアッションの動向 阿部 義己
永田鉄山の国家総動員思想 佐藤 雅志
国際化について 富良野 純
この一年を振り返って (一九八九年度) 三・二四
地球外知的生命体との交流 小野 和久
オペラの主役はだれなのか 上野 龍夫

環境危機と人類の選択について考える 菊田 正博
日本および韓国における食行動—食事作法について— 芳賀 文子
高橋八重子

この一年を振り返って (一九九〇年度) 三・二三
漢詩の国での少しばかりの体験から 木村 珪子
Allan E. Stoaue: Emily, Emilyについての考察 鈴木美恵子
生と死のあいだ 森 一
詩人としてのシェイクスピア 芳賀 馨

こはん文化圏のつげもの 大滝 秋夫
この一年を振り返って (一九九一年度) 三・二二
トリカブトの光と陰 高野 静子
組織における上下関係について 渡辺 勇
言語と社会 片岡智恵美

店頭・店内広告のレタリング 川村 洋一
会津の伝統的な郷土料理の社会・経済・文化的背景をさぐる 斎藤 和子
この一年を振り返って (一九九二年度) 三・二三
心象風景の中に表現していること 明石 英子
ペーパーバッグの中の日本 上野 龍夫

芳賀馨先生出版記念会 アメリカ文学との出会い 芳賀 馨
聖母子像における幼子イエスの顔の表現 上野 龍夫
リードが日本で見たもの 田村 忠輝

この一年を振り返って (一九九三年度) 三・二七
長崎の文化 森 一
アラン・ロ・スローンのテレビドラマの特徴—Emily, Emilyを中心に— 鈴木美恵子
引地 岳雄
トリカブトと菊のはな 高野 静子
米国ミステリーの中の日本 上野 龍夫
スペイン・ポルトガルの旅 高橋八重子
赤石 英子
日本人と英語—発音と借用力— タカナ語を中心に— 青木 義孝

この一年を振り返って 十一・二七
《編集後記》
編集の仕事にたずさわって三年、三回日の会報発行にこぎつけた。事務局長には絶えず、きめ細やかな御配慮を頂き、結局、原稿執筆や執筆依頼は大半引き受けて下さり、毎年八月末には、ほぼ必要な原稿が私の所へ届いている。前任の引地先生にも時折アドバイスを頂いている。紙面の組み方や内容は、毎号ほぼ同一パターンで済みそうであるが、時の流れと共に自然に、少しずつ変わってゆくだろうと思う。

会報の「本部事務局だより」の中で、原稿応募を呼びかけてありますが、ある日、私の方から執筆を依頼することがあると思います。御協力をお願い致します。(補 純一)

— 4 —